

子規全集

第七卷 歌論選歌

子規全集

第七卷

歌論
選歌

講談社



N. D. C. 910 696 p 20 cm

子規全集 第七卷

歌論選歌

定價 參阡六百圓

昭和五十年七月十八日 第一刷發行

著者 正岡子規

編集表 正岡忠三郎

發行者 野間省一

發行所 株式會社 講談社

東京都文京區音羽二―一二―二

電話 東京(〇三)九四五―一一一(大代表)

郵便番號 一二二 振替 東京三九三〇

印刷所 株式會社 精興社

製本所 大製株式會社

©正岡忠三郎 一九七五年
落丁本・亂丁本はお取りかえいたします

歌論選歌

目次

歌論

字餘りの和歌俳句	三
東西南北序	六
〔海上胤平の歌評の評〕	七
歌よみに與ふる書	二〇
再び歌よみに與ふる書	二三
三たび歌よみに與ふる書	二六
四たび歌よみに與ふる書	二九
五たび歌よみに與ふる書	三三

六たび歌よみに與ふる書	三
七たび歌よみに與ふる書	三
八たび歌よみに與ふる書	四
九たび歌よみに與ふる書	四
十たび歌よみに與ふる書	四
あきまろに答ふ	五
人々に答ふ	五
歌の題	八
五七五七七	九
短歌の調子	九
一つ二つ	一〇
賀の歌	二
〔佐々木信綱の詠歌磯うつ浪の評〕の評	二
萬葉集卷十六	三

曙覽の歌		一三五
短歌小會		一五七
歌話		一六三
短歌第二會		一八九
〔新月會詠草 歌評〕		一九九
短歌第三會		二〇一
短歌第四會		二〇七
短歌第五會		二一八
鹿の卷抄		二二三
短歌を募る辭		二二七
短歌第六會		二三〇
落葉の卷抄		二三三
鶴物語		二三六
再び短歌を募る辭		二四四

一月短歌會	二四六
短歌愚考	二五〇
笠の卷抄	二五四
〔七日會咏艸 歌評〕	二六六
二月短歌會	二六八
三月短歌會	二七一
三たび短歌を募る辭	二七三
陶器の卷抄	二七五
草徑集を讀む	二七八
春夜の卷抄	二八一
磐之屋歌集を讀む	二八四
四月短歌會	二八八
「こやす」といふ動詞	二九一
第三回募集短歌に就きて	二九四

短歌第二句切の一種	二九七
鎌倉懷古の卷抄	三〇〇
竹里歌話	三〇五
萬葉集を讀む	三一
五月短歌會	三二
〔竹の里人君へ〕に答ふ	三三
入獄談を聽く	三六
芝居の卷抄	三〇
線香の煙	三三
募集歌「讀平家物語」に就きて	三五
六月第二會	三九
報東々幾數の卷抄	四二
七月短歌會	四五
七月第二會	四八

星の卷抄	三五
八月短歌會	三五
八月短歌第二會	三六
九月短歌會	三八
九月短歌第二會	三六〇
〔無題〕	三六二
鬼の卷抄	三六四
十月短歌會	三六八
橋の卷抄	三七一
十一月短歌會の歌	三七四
旋頭歌を募る	三七七
御題の短歌を新年の紙上に載することに就きて	三八〇
病牀歌話	三八二
〔『本居宣長翁全集』書入れ評語〕	三八五

選歌

竹の里人選歌 三九七

『竹の里人選歌』補遺 五八一

參考資料 五九

解題 蒲池文雄 六三

解説 杉浦明平 六三

この巻には、短歌革新の口火を切つた十たびに及ぶ「歌よみに與ふる書」をはじめ、新しい歌壇の道標となつた歌論歌話と、舊派打倒の旗印のもとに子規が選んで新聞「日本」「日本附録週報」に載せた和歌を門人が集成した『竹の里人選歌』ならびにその補遺とを收録した。

歌 論

字餘りの和歌俳句

短歌三十一文字と定まりたるを三十二文字乃至三十六文字となし俳諧十七字と定まりたるを十八字乃至二十二字にも作る事あり。これを字餘りと云ふ。而して字餘りを用うるは例外の場合にて常に用うべきにあらずとは歌人俳諧師等が一般に稱へ來れる掟なり。されど此掟程謂れなき者はあらじ。

三十一文字と定め十七文字と定めし事も是れ人間が勝手につくりし掟なればそれに外れたりとて常に用うべきにあらずとは笑ふべき謬見なり。字餘りと云ふ文字を用うればこそ此謬見も起るなれ、試みに字餘りと云ふ文字の代りに三十二字の和歌三十三字の和歌十八字の俳句十九字の俳句と云ふが如き文字を用ゐなば字餘りは是れ字餘りにあらずして一種新調の韻文なる事を知るに足らん。新調の韻文を作るに何の例外と云ふ事あらんや。

或人曰く字餘りの和歌俳句は句調あしく口にたまる心地す故に好んで用うべからずと。稍々ことわりあるに似たれど再び考ふればこれも亦謂れなき事なり。句調惡しとか口にたまるとか言ふは三十一字又は十七字を標準としての上にて言ふものにして例へば十七字卅一字のつもりにて吟ぜし者が十九字卅三字等ならんか自ら句調惡しく口にたまらざるを得ず。是れ其句切りの長短、發音の伸縮など總て三十一字十七字に適して三十一字十七字以外に適せざればなり。初めより十八九字又は三十二三字の覺悟にて之を吟ずるか若しくは虚心平氣にて敢て三十一字十七字と豫定せずして之を吟じなば句調のあしき處もあらざるべし。先づ入る者は主と爲るとか十七字三十一字と古き世より定まれるが故に耳も口も此調に許り馴れたるものとおぼし。

さりながら習慣の外に句調の善惡と言ふ事なきに非ず。例へば「五」「七」と云ふは調子善きものなれば漢詩には「五言」「七言」多く日本には「五七調」又は「七五調」多きなるべし。されどもこれを以て唯一の好調となすは固より僻見のみ。

世人多くは曰く好んで字餘りの句を爲すは徒に新を弄し奇を銜する者なりと。何の言ぞや。彼等は針小の眼孔を以て此貴重なる韻文を自己の狹隘なる感情の範圍内に置かんと欲する者に非ざるを得んや。今少し眼を開いて見よ。支那古詩の結尾には一句十餘字の長句あるを見るべし。是れ其結末を振はしむる爲めには最も必要なるなり。これと同じく和歌俳句の上にも語勢を強くする爲に字餘りを用うる事已むを得ざる者にしてある人の言ふが如く新を弄し奇を銜するに非るなり。

況んや三十一字の和歌十七字の俳句は古來より言ひ古して大方は陳腐に屬し熟套に落ちし今日少